巻頭言



滋賀医科大学医学部看護学科　学科長
桑田　弘美

2014 年 4 月時点で看護系大学は 235、修士課程は 146、博士課程は 72 となり、2015 年 4 月には、大学の看護学科が 15 新設される予定となっています。そのため文科省は、早急に看護教育に携われる人材を養成するように提言しています。現在では、学部生の 20 人に 1 人が大学院に進学しているという計算になるそうですが、日本における論文数はそれほど増えていないと言われ、それは修士課程や博士課程を修了してすぐに教員になることが求められ、中には助手をしながら社会人の大学院生として学ぶことから、教育業務に追われて研究がなかなか進まない現状があるようです。看護における教育者や研究者の養成には、もっとじっくり時間をかけたいのにできない現状で、大学の紀要は、やはり、大学院生や若手研究者の研究成果の公表のワンステップとして利用できることで、研究活動の発展に大きな役割を果たすと考えています。

医学書院の 1 月 26 日付の医学界新聞では、太田喜久子先生と真田弘美先生との看護研究に関する対談を載せていますが、「看護研究は臨床に始まり、臨床に終わる」の文章の中で、真田先生は、「看護学は実践科学なので、自分が出した結果が直接患者さんの役に立つ点が何よりも素晴らしいですよね。看護研究というのは、臨床で生まれた具体的な疑問から現象の抽象度を上げ、概念化して臨床に戻すということの繰り返し。出発点も最終地点も患者さんのところなんです。未来の患者さんのためを思って、データを提供してくださった患者さんたちの期待に応えるためにも、『研究結果は必ず還元するのだ』という気概と倫理観を忘れずにいたいです。」と述べられました。また、看護の研究は、臨床で生じた疑問を解決するために行いますので、研究方法に限界を決めてしまってはいけないことも述べられていました。臨床では色々な疑問にぶつかり、それは何故なんだろうと考えることが多いと思います。看護学ジャーナルは、教員や大学院生だけでなく、臨床の看護職の方々の投稿も多くなりました。査読の体制もしっかり取られていますので、査読が帰ってきた看護師さんが、「どのように修正したら良いかわかりやすい」と、研究論文に不十分なところがあっても適切なアドバイスが得られることで、とても喜んでいらっしゃいました。臨床にある研究の種を素早く察知し、やり抜く姿勢を持ち続けたいと思います。

ジャーナルに投稿することで、若い研究者だけでなく、多くの臨床の看護職の方々の良い学びにも繋がっています。これからも、研究成果を世の中にどんどん発信していけるジャーナルとして、発展していくことを期待しています。

平成 27 年 2 月